

---

# 恋する小説家

子猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋する小説家

### 【Nコード】

N1256F

### 【作者名】

子猫

### 【あらすじ】

中学校三年生になってからしばらくして、私に好きな人ができた。その人は風邪をひいていた私に優しく声をかけてくれた。その人の笑顔に私は一目惚れしてしまった

私の名前は佐藤由美。自分の取柄と思っているのは元気で友達が多いところ。好きなことは読書。特にファンタジーが大好きで、たまに自分でも書いたりする。でもそれは人に見せる自信がなくて、自分だけの物としてしまっている。

そんな私に好きな人ができた。同じクラスの早坂淳平っていう男の子だ。私がその人を好きになったきっかけは、私が風邪気味だったときのことだ。風邪で鼻をすすっている私にその人は、

「大丈夫？風邪でも引いちゃった？」

と声を掛けてきた。今までまともに口をきいた事もなかったのに、その人は私を心配してくれた。

「ありがとー！心配してくれるんだー！」

と私は冗談混じりに言ったのに、

「うん、佐藤さんはいつも元気だから。」

と真面目な顔で答えてくるので、私はなにも言えなかった。そのときの彼の笑顔に熱以上に頭が熱くなつてぼーっとしていた。彼の純粹な優しさに私は惚れてしまったんだ。ほぼ一目惚れって感じかな。

・

一目惚れって一時の感情の高まりで冷めやすい物だと思ってたけど、実は全然違って私はあの時から一ヶ月間これほど人を好きになったことはない！と言う位に淳平君の事を思っていた。学校で会うたびにおはよう！と元気に声をかけて、その時は恥ずかしいという気持ちではなかったけど淳平君におはよう、と返されると自分でもまた顔が赤くなっているのを感じた。

それで私はついに放課後、屋上に淳平君を呼んだ。屋上に来られる？と言った時も笑顔でいいよ、と返してくれた。屋上で淳平君を待っているとき、私は心臓がバクバクと鳴っているのを落着か

せようと必死だったが無駄だった。ダメダメ！こんなんじゃまとも  
に話せやしないよ・・・

とうとう淳平君が来た。

「ごめんね、待たせちゃったかな。」

「う、ううん！全然！全然待ってないよ！」

あー・・・緊張してるなあ・・・

もう自分でも何を言っているのか全然わかんなくなってるし。あ、  
沈黙しちゃってる・・・。早く言わなきゃ！

「あつあのね！淳平君・・・私ね・・・少しまえからずっと・・・」  
声がかすれてくる。落ち着いて！私！きつとちゃんと伝えられるん  
だから！

「ずっと・・・ずっと！淳平君の事が好きでした！」

大事なところはちゃんと言えた。しばらくそのまま時間が止まった  
ような気がした。私は短い告白の後、やっと言えた！というよりは  
言ってしまったあ・・・というような気持ちになった。ながーい沈  
黙の後、ついに淳平君が話始めた。

「じゃあ、佐藤さんの持っている秘密、一つだけ教えてくれる？」  
え？なんなのこれ？予想もしなかった展開に私の頭は混乱していた。  
その間、淳平君は一言もしゃべらないでただずっと私の顔を見つめ  
ていた。

私は恥ずかしくて目を逸らしていた。もう・・・なんなのこれ？

「私の・・・秘密？」

「そう、まだ誰にも言ったことのないこと。一つくらいあるんじや  
ないの？」

私の秘密にしていたこと。確かに一つだけある。今まで誰にも言わ  
なかったこと。私が書いている小説のことだ。もしかして淳平くん  
は知っているのかな・・・でも誰にも言っていないし・・・

「一つだけあるかな・・・私ね、本を読むのが好きだから小説書い  
てるんだ！」

「へー！小説ね。佐藤さん、よく図書室に行くことあるもんね。」

「そう！そうなの！ファンタジーを読んできると魔法使いとか王子様とかがよく出てきて、怪物や悪い人たちと戦ったり・・・」

ハツと気づくとすぐ熱っぽく淳平君に一人で語っていた。そんな私を淳平君は微笑みながら見てくる。私はちよつと恥ずかしくなった。でもいつの間にか私は自分でもちゃんと話せていることに気がついた。秘密を教えたときからなんだか心が軽くなった気がした。心を開いて淳平君に話すことができた。

「あははは！やっぱり佐藤さんは面白いや！いいよ、付き合おう！ええ？！何でそうなるのー？と混乱しながらも、その日私たちは一緒に帰った。帰り道は私の好きな本の話をつぱいした。ずっと私の話を笑いながら淳平君は聞いてくれた。きつと、淳平君も本が大好きなんだろうな。今になってちゃんと告白できて良かったと思えた。

そんな流れで（どんなだよ！）私たちは付き合うことになった。

登校するときも下校するときもいつも一緒に帰ったし、休日に遊びに行ったりもした。前と変わったのは生活そのものだけでなく、私たちはお互いを名前で呼び合うようにもなった。やっぱり名前で呼び会うのは恋人同士って感じがしていいなあ・・・。そんな楽しい毎日が過ぎ、ある日淳平君は私に頼み事をした。

「由美が書いてる小説ってどんな話？」

「私が書くのはやっぱりファンタジーだよ。」

「そうなんだ。あらすじとか教えてよ。」

「いいよ。でもちよつと恥ずかしいかも・・・」

そう言いながら私は、小説用のノートを開いて冒頭を読み上げた。

ある村に【黒の森】と呼ばれる恐ろしい怪物たちがいる場所がありました。夜な夜な村に現れては羊やヤギを連れ去り、森まで連れ去っていくのです。村人たちは大変困り、緊急集会を開きました。「誰か森まで調査をしに行ってくれるものはおらんのだろうか。」

と長老が言いました。すると一人のたくましい若者が勢いよく立ち上がり、

「俺が行きます。」

と言いました。そうすると他にも自分も行きたいという村人が次々と現れてその中から数人が選ばれ、【黒の森】に行くことになりました……

物語の最初の部分を読んで私はまた話し始めた。

「始まりはこんな感じかなあ……」

「なんか自信なさそうだね。」

「うん、まあね。なんかしっくりこなくてさあ。話の見通しも立ってないんだよね。」

私は自分の書いた物語に自信をなくしてしまった。すると淳平君は私に、

「他のジャンルにも挑戦してみたら？」と言った。

「他のジャンルかあ……」

私ってファンタジー以外あんまり読まないんだよね。たまにスポーツ青春系とかホラーとか恋愛とかも読むんだけど……

結局その日は答えが出せず淳平君にまたね、って言って家に帰った。お風呂に入っているとき、また小説のことを考えていた。

「なんかあるかな……ネタも浮かばないし……」

と私は独り言を呟いていた。するとふと思いついた。

「そうだ！私にはこれがあるじゃない！」

ザバツ！と水しぶきをあげて私はお風呂から出た。そしてそのまま自分の部屋に直行し、ノートを開いた。よし！これなら……

明日淳平君に見せてあげよう。この小説。結構うまくできそう。私は淳平君のことを思いながら夜通しで小説を書き続けた。

次の日、私と淳平君は久しぶりに一緒に屋上に行った。お弁当を

食べた後、私は咳払いをしてみた。

「えー私、佐藤由美は昨日徹夜で小説を書いていました……。私、いつもと違うジャンルに挑戦したんだよ！なんだと思う？」

「おー！なんだか自信满满だね。いい小説が書けたのかな？由美が書くものだから……。コメディーとか？」

「ちがうつ！なんでそうなるかな？」

馬鹿みたいに二人でコントをしてあははと笑った。

「私ね！今恋愛小説書いてるんだ！」

「おおーファンタジーからだいぶん離れたね。どんなの？」

「これなんだけど……」

中学三年の私には好きな人ができました。その人は私が風邪をひいているときに優しく声をかけてくれて、大丈夫？と聞いてくれました。私はそのときからその人のことが気になっと思っていました。そんな私もとうとう告白をする決心がついたのです。屋上に彼を呼び出した私は彼が来るなり告白しました。

「私！淳平君のことが好きなんです！」

私はとうとうその人に思いを伝えました。するとその人は……

私がそこまで読み上げると突然、淳平君が私を抱き寄せてきた。そして私の耳元で呟いた。

「するとその人は言いました。『僕のコメディーを教えてください。実は僕はあなたよりももっと前からあなたのことが好きでした。』」

「え？」

淳平君は私の手を握り、目を見つめながら言った。

「俺のコメディー。由美も教えてくれたでしょ？俺も教えないと不公平じゃない！」

そういつてまたいつもの笑顔で私を見た。誰よりも、何よりも眩しい笑顔に私は自然と笑顔を返した。

青空が広がっている。太陽が私たちを祝福してくれているみたいだ。

私たちは絶対に離れない、今だって、これからだってずっと、ずっと



（後書き）

二日連続で恋愛小説を投稿する色ボケ中学生の作品でしたw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1256f/>

---

恋する小説家

2011年1月28日02時39分発行